

CASE REPORT

上咽頭転移をきたした肺癌の1例

高田和外<sup>1</sup>・松本修一<sup>1</sup>・平松哲夫<sup>1</sup>・  
小島英嗣<sup>1</sup>・田中博之<sup>2</sup>

A Case of Lung Cancer with Epipharyngeal Metastasis

Kazuto Takada<sup>1</sup>; Shuuichi Matsumoto<sup>1</sup>; Tetsuo Hiramatsu<sup>1</sup>;  
Eiji Kojima<sup>1</sup>; Hiroyuki Tanaka<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Division of Respiratory and Allergy Medicine, Komaki Municipal Hospital, Japan; <sup>2</sup>Division of Respiratory Medicine and Allergology, Aichi Medical University School of Medicine, Japan.

**ABSTRACT** — **Background.** Only 2 cases of lung cancer with epipharyngeal metastasis have been reported in Japan. Lung cancer metastasizes to the epipharynx extremely rarely. **Case.** An 81-year-old woman with a past history of large cell carcinoma of the lung presented with nasal obstruction. Magnetic resonance imaging (MRI) revealed a mass in the epipharynx and a bulky tumor covered with necrotic tissue was found by nasopharyngoscopy. The histology of the epipharyngeal tumor was the same as that of the primary lung cancer. A diagnosis of lung cancer with epipharyngeal metastasis was given. Local radiation therapy dramatically improved symptoms. **Conclusion.** We reported an extremely rare case of epipharyngeal metastasis from lung cancer 22 months after diagnosis of the primary lesion. Systemic chemotherapy with local control is preferable unless the patient's condition deteriorates.

(JLCC. 2010;50:33-36)

**KEY WORDS** — Lung cancer, Epipharyngeal metastasis, Metastatic epipharyngeal tumor

Reprints: Kazuto Takada, Division of Respiratory and Allergy Medicine, Komaki Municipal Hospital, 1-20 Johbuji, Komaki-shi, Aichi 485-8520, Japan (e-mail: k-takada@komakihp.gr.jp).

Received April 9, 2009; accepted October 9, 2009.

**要旨** — **背景.** 肺癌からの転移性上咽頭腫瘍はこれまでに本邦で2例のみ報告されている。肺癌の上咽頭転移は極めて稀である。**症例.** 肺大細胞癌の81歳女性に鼻閉が出現した。MRIにて上咽頭に腫瘍性病変を認めた。鼻咽喉ファイバーで上咽頭全体を占める白苔に覆われた腫瘍の生検を行った。細胞学的特徴や免疫染色パターンの

一致から肺癌からの転移と診断された。放射線治療で腫瘍は縮小し鼻症状は著明に改善した。**結論.** 肺癌診断22ヶ月後に極めて稀な上咽頭転移を合併した1例を経験した。全身状態が良好であれば局所管理とともに全身化学療法の併用が望ましいと思われた。

**索引用語** — 肺癌, 上咽頭転移, 転移性上咽頭腫瘍

はじめに

頭頸部腫瘍の中で上咽頭の悪性腫瘍は稀であり、その中でも転移性腫瘍は極めて稀である。肺大細胞癌の経過中に上咽頭転移をきたした1症例を経験したので以下に

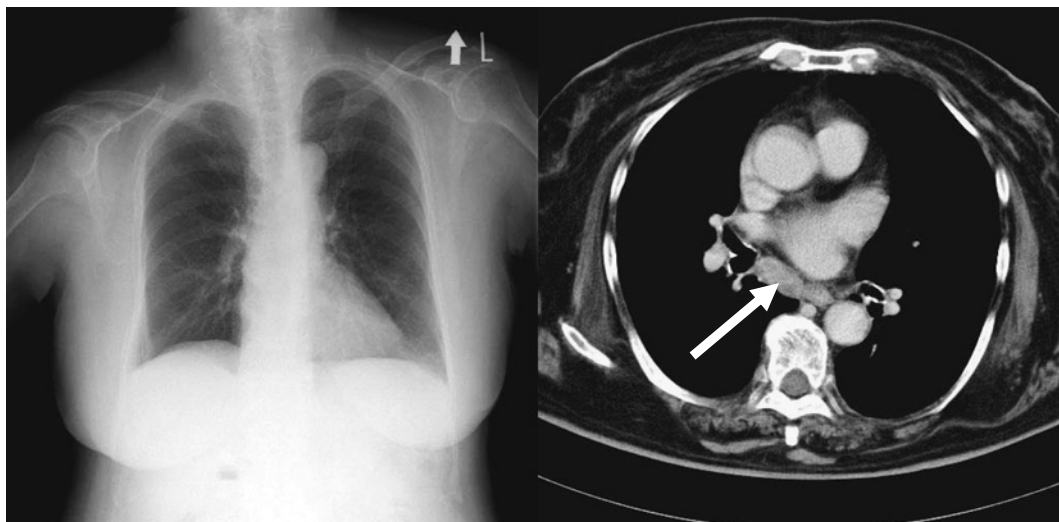
報告する。

症例

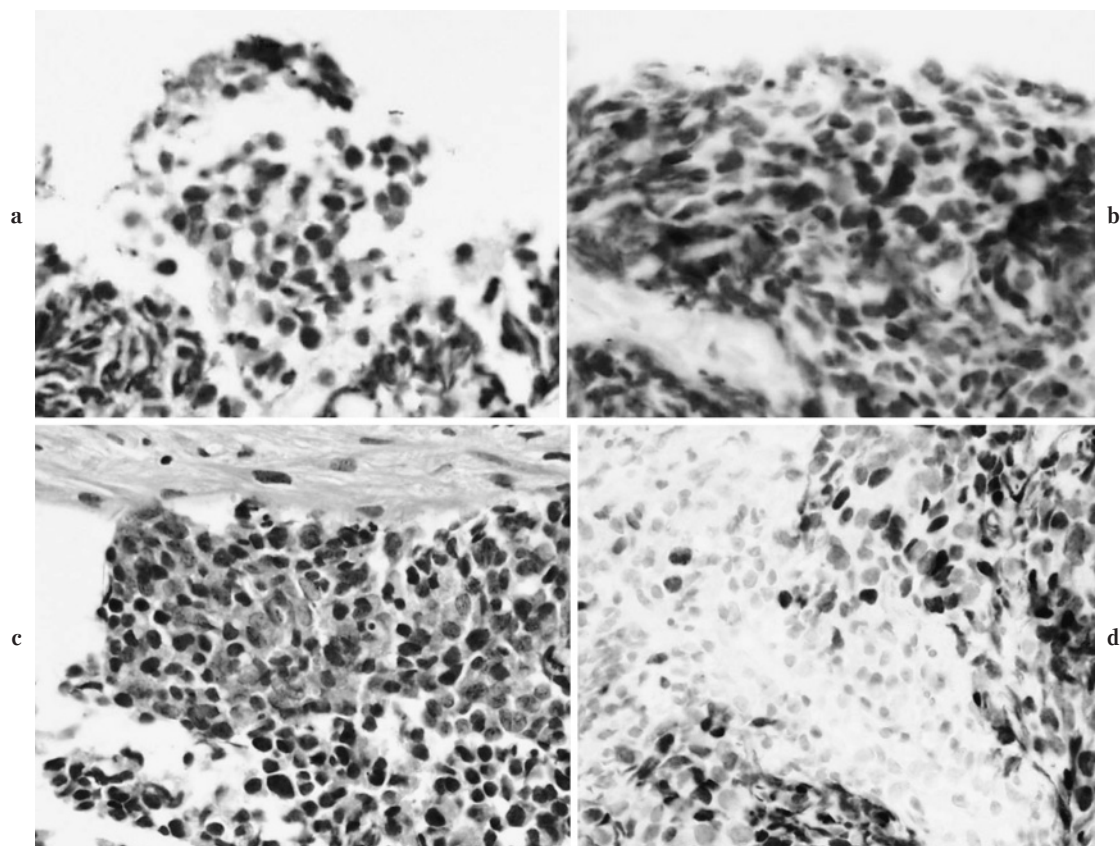
症例：81歳女性。  
主訴：鼻閉感。

<sup>1</sup>小牧市民病院呼吸器アレルギー内科；<sup>2</sup>愛知医科大学病院呼吸器アレルギー内科。  
別刷請求先：高田和外，小牧市民病院呼吸器アレルギー内科，

〒485-8520 愛知県小牧市常普請1-20 (e-mail: k-takada@komakihp.gr.jp).  
受付日：2009年4月9日，採択日：2009年10月9日。



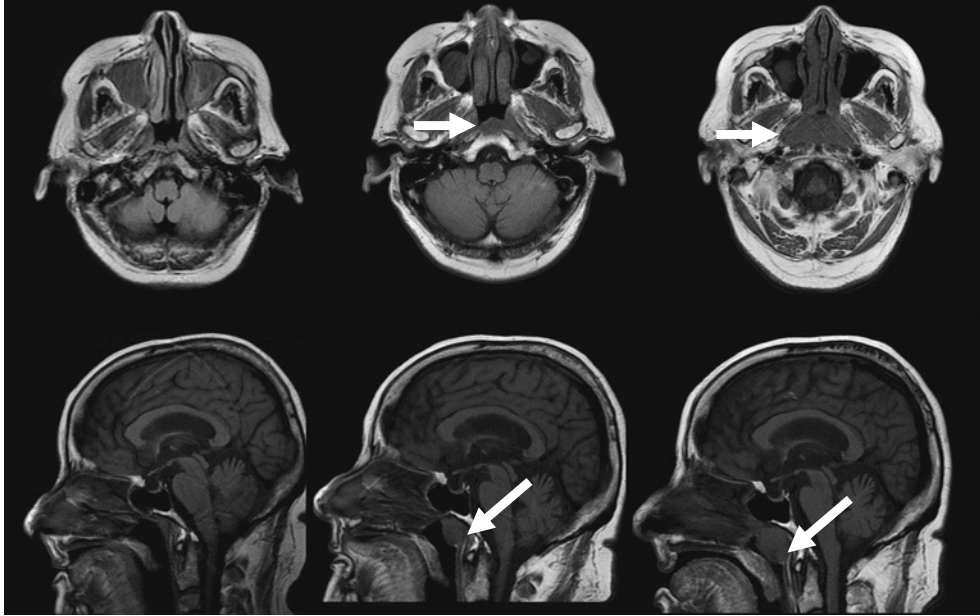
**Figure 1.** Chest computed tomography (CT) shows a mass lesion in the right lower lobe of the lung (arrow).



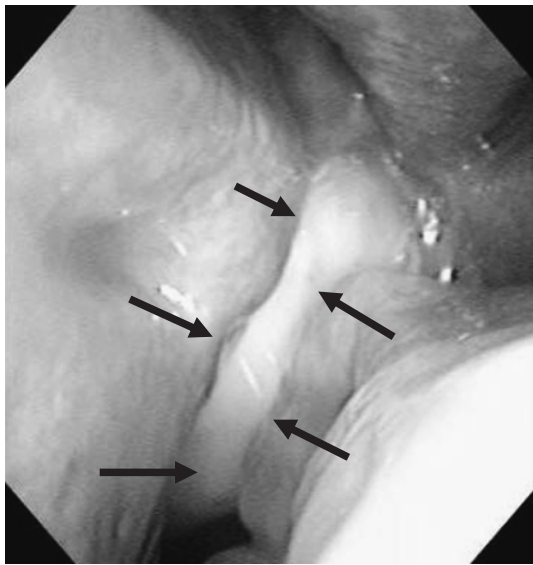
**Figure 2.** a) Histology of the lung tumor shows undifferentiated cancer cells showing non-specific structures by hematoxylin-eosin stain (H.E. stain) and b) positive stain for thyroid transcription factor-1 (TTF-1). Epipharyngeal tumor shows almost the same histology as primary lung cancer by c) H.E. stain and d) TTF-1 stain.

既往歴：高血圧症。  
家族歴：特記すべきことなし。

喫煙歴：なし。  
現病歴：2007年1月下旬に眩暈を主訴に来院し多発



**Figure 3.** MRI reveals an epipharyngeal tumor (arrows) which grew gradually, ultimately occupying the pharyngeal cavity. Examinations were performed on January 2007 (left), on June 2008 (middle) and on December 2008 (right), respectively.



**Figure 4.** Nasopharyngeal fiberoptic shows a bulky, white tumor covered with necrotic tissue occupying the entire epipharynx (arrows) and the post-pharyngeal wall can't be seen.

性脳腫瘍として同日入院となった。右肺S<sup>6</sup>末梢に径32×15 mmの異常影 (Figure 1) を認めた。上下部消化管や乳腺や頭頸部など他の部位に異常所見はなかった。経食道エコー下針吸引細胞診を行ったところ、壊死が強く特徴的な分化のみられない未分化な異型細胞が充実性

に増殖しており、免疫染色の結果は AE1 や AE3 やケラチンの上皮系マーカーや Thyroid Transcription Factor-1 (TTF-1) 陽性であったため (Figure 2a, 2b)、肺大細胞癌 cT2N0M1 (BRA) 臨床病期 IV 期と診断した。

3月上旬に脳転移に対し定位放射線治療を施行し徐々に神経学的所見は改善した。PS 1 であり、本人の強い希望で経口抗癌剤 (テガフル・ギメラシル・オテラシルカリウム 120 mg/body) を選択し、3ヶ月間継続した。8月、右大腿骨頸部の骨転移に放射線照射 (30 Gy/10 fr) を施行した。2008年2月には右副腎に転移を認めた。

2008年6月の頭部MRIにて上咽頭に軟部陰影を認めたが、併存していた両側上顎洞炎による後鼻漏の可能性もあり経過観察としていたところ、11月頃より両側鼻閉感が出現し徐々に増悪した。12月の頭部MRIで異常影は増大 (Figure 3) した。

両側上顎洞の病変は経過や画像所見から慢性副鼻腔炎で矛盾なかった。鼻咽頭ファイバーにて、口腔や鼻腔には異常所見はなかったが上咽頭腔全体を占める白苔に覆われた腫瘍性病変 (Figure 4) が確認された。生検の結果 (Figure 2c, 2d)、細胞学的特徴や免疫染色の結果が一致しており、肺癌からの転移性上咽頭腫瘍と診断した。

2009年2月中旬より、睡眠障害まで引き起こしていた鼻閉感は上咽頭腫瘍に対する放射線照射 (40 Gy/20 fr) で著明に改善した。なお上咽頭腫瘍で EGFR 遺伝子変異を検索したが認められなかった。

## 考 察

上咽頭とは鼻腔後端の後鼻腔から軟口蓋上面までの部位と定義され、この部位に発生する悪性腫瘍は中枢神経系を除いた頭頸部悪性腫瘍の中でも約4%と稀な疾患である。<sup>1,2</sup> 上咽頭の悪性腫瘍としては、扁桃上皮や移行上皮より発生する未分化扁平上皮癌が大部分を占め、他には粘膜上皮から発生する分化型扁平上皮癌、小唾液腺由来の粘表皮癌や腺様嚢胞癌、悪性リンパ腫などがあるが、その中で転移性腫瘍は極めて稀である。<sup>1,2</sup> 咽頭領域に限局した転移性腫瘍の頻度に関する報告はない。

肺癌の咽頭への転移例は極めて稀であり我々の検索しえた範囲では本邦で2例のみであった。<sup>3,4</sup> 伊井らの症例は肺腺癌診断1ヶ月後に上咽頭を含め鼻腔、副鼻腔、口蓋扁桃などにポリープ状の多発転移であり、<sup>3</sup> 植村らの症例も肺腺癌であったが抄録のみで不詳であった。<sup>4</sup>

転移性上咽頭腫瘍の他の原発部位としては肝細胞癌や膀胱癌の報告があるが、<sup>5,6</sup> Oidaらも肝細胞癌からの咽頭領域への転移は世界で10例と述べており、<sup>5</sup> 他の悪性疾患においても上咽頭転移は極めて稀であることがわかる。

本例は肺癌に上咽頭癌を合併した異時性重複癌の可能性も考えられたが、原発肺癌組織との細胞学的特徴の類似性や肺癌に特異性の高いTTF-1に対する免疫染色の結果から肺癌の転移と考えた。また全身性に遠隔転移が発生している時期であり臨床的にも転移性病変として矛盾なかった。さらに一般に原発性上咽頭癌は早期より頸部リンパ節転移がみられるのが特徴であるが、<sup>1,2</sup> 本症例では頸部含めリンパ節の病変はみられなかった。

転移の機序として本例では、診断時より多発脳転移を有し、また頸部や胸部のリンパ節腫大も画像上認められないことから、全身への血行転移の一部として上咽頭へ転移したものと考えられた。他に頭頸部へは胸腔内圧上昇の際に椎骨静脈叢を介し咽頭静脈叢に血流が逆流する血行性転移の経路も、腹部の悪性腫瘍では考えられている。<sup>7</sup> 口腔領域では軟部組織である歯肉への転移の機序として、慢性炎症に伴い毛細管網が発達し癌細胞が定着しやすくなるという機序も推測されている。<sup>8</sup> 本例も経過中両側副鼻腔炎が遷延しており、同様の機序で鼻腔や咽頭領域の慢性炎症が転移に関与していた可能性もあるのかもしれない。

上咽頭腫瘍の症状や臨床所見には上咽頭の解剖学的構造が大きく関与している。空間的余裕があるため本例のように腫瘍が増大するまで症状はでにくい。耳管咽頭口が閉鎖されると耳鳴りや難聴や滲出性中耳炎となり、鼻腔症状として鼻閉や鼻出血が起きる場合もあり、また

頭蓋底に浸潤すると外転神経から動眼神経や滑車神経へと麻痺が拡大し多彩な眼症状を呈する。<sup>2</sup> 感染や潰瘍形成など腫瘍の2次的変化の関与も症状には関連する。<sup>5</sup> 鼻腔領域への肺癌転移では腫脹や疼痛が多いとの報告もある。<sup>9</sup>

咽頭粘膜への転移も、他の頭頸部領域や皮膚などへの転移のように経過のかなり末期に全身播種の一部として発生することが多いと思われ、予後は不良である。生存期間は原疾患の性質がかなり大きく関与することだが、先述の肺癌の咽頭転移例では転移診断4ヶ月後に死亡しており、<sup>3</sup> 肝細胞癌からの咽頭転移でも80%の症例は診断1年以内に死亡したと報告されている。<sup>5</sup>

そのため治療はQOL維持や出血などの症状管理といった局所治療とともに原疾患の病勢を抑えることが肝要となり、本症例でも全身状態の良好なうちにプラチナ系抗癌剤を含む併用化学療法を追加していくことが必要と思われた。

## 結 語

極めて稀な肺癌からの転移性上咽頭腫瘍の1例を経験した。口腔や鼻腔などの上気道も、稀ではあるが肺癌の遠隔転移部位として認識しておく必要があると思われた。

## REFERENCES

1. 吉野邦俊. 頭頸部腫瘍の種類. 古川 亙, 編集. 新図説耳鼻咽喉科・頭頸部外科講座5. 頭頸部腫瘍. 東京: メジカルビュー; 2001:2-5.
2. 浅井昌大. 上咽頭悪性腫瘍. 加我君孝, 市村恵一, 新美成二, 編著. 新臨床耳鼻咽喉科学. 東京: 中外医学社; 2002: 458-463.
3. 伊井敏彦, 道津安正, 芦谷淳一, 谷口治子, 志摩 孝, 坂本 晃, 他. 鼻咽頭および副鼻腔に多発転移を認めた若年者肺腺癌の1症例. 日胸疾会誌. 1992;30:1884-1888.
4. 植村哲也, 近藤昭男, 石田達也. 肺癌による転移性上咽頭腫瘍の1症例. 日本耳鼻咽喉科学会会報. 2002;105:1008.
5. Oida Y, Ishii M, Dowaki S, Tobita K, Ohtani Y, Imaizumi T, et al. Hepatocellular carcinoma with metastasis to the pharynx: report of a case. *Tokai J Exp Clin Med.* 2005;30:31-34.
6. 松谷亮一, 三代康雄, 猪原秀典, 赤埴詩朗, 久保 武, 松宮清美. 上咽頭転移をきたした膀胱癌症例. 日本耳鼻咽喉科学会会報. 2002;105:652.
7. Batson OV. The function of the vertebral veins and their role in the spread of metastases. *Ann Surg.* 1940;112:138-149.
8. Hirshberg A, Shnaiderman-Shapiro A, Kaplan I, Berger R. Metastatic tumours to the oral cavity - pathogenesis and analysis of 673 cases. *Oral Oncol.* 2008;44:743-752.
9. Bernstein JM, Montgomery WW, Balogh K Jr. Metastatic tumors to the maxilla, nose, and paranasal sinuses. *Laryngoscope.* 1966;76:621-650.